

○第53回（令和3年1月25日）評価委員会評価

令和2年度は、6月26日～28日にかけて連携排砂が、7月28日～7月30日にかけて連携通砂が実施された。

出し平ダムからの排砂量は、目標排砂量約20万m³に対し、約12万m³となったが、想定変動範囲の約10万m³～38万m³の範囲内であった。連携通砂では出し平ダムの堆砂量が約3万m³減少した。

宇奈月ダムにおける連携排砂及び連携通砂での土砂変動量は累計で約11万m³の減少であった。

令和2年度の連携排砂及び連携通砂について、今回報告のあった水質、底質および生物の環境調査結果をみる限り、連携排砂および連携通砂による一時的な環境の変化はあるものの、周囲の環境に大きな影響を及ぼしたとは考えられない。

今回の連携排砂、連携通砂に伴う環境調査の結果から以下の知見が得られた。

◇水質調査について

- ・連携排砂、連携通砂時の各指標は概ね既往の観測値と同程度であった。なお、降雨が継続せず連携排砂が実施されなかった6月14日～15日の洪水時においても、海域のうち河口部に近い地点で連携排砂実施時と同程度の濁度が観測された。

◇底質調査について

- ・各指標は概ね既往の観測値と同程度であった。

◇水生生物調査について

- ・水生生物調査で確認された種数・個体数は概ね既往の変動の範囲内であった。
- ・アユの胃内容物調査の結果、消化管に含まれる砂粒・無機物の量は比較対象

の他河川と同程度であり、その多くが珪藻殻であることが確認された。

- ・アユの食味試験の結果は良好であり、一定時間無給餌で飼育することにより更に食味が向上することが確認された。

◇宇奈月ダム先行操作の効果について

- ・宇奈月ダムについては、先行操作により従来操作に比較して自然流下状態が長く維持されたことや、自然流下開始直前の出し平ダムからの流入量が増加したことにより、流入土砂量の多くを下流に排出することができたことから、結果として年間の堆積土砂量を1万m³に抑えることができた。
- ・一方、出し平ダムについては、ゲート操作を遅らせたことにより従来操作に比較して自然流下状態が短縮されたことに加えて、降雨が短時間集中型だったこともあり、結果として前年度よりも堆積傾向が強くなった。
- ・連携排砂における宇奈月ダム直下のSSピーク濃度では、従来操作に比べて先行操作では約2割の減少効果が見られた。
- ・河床低下の防止や礫河原の再生に寄与する粗い粒径（70～500mm）の土砂供給量が、連携排砂及び連携通砂を通じて、宇奈月ダム直下地点において従来操作に比べて約3倍の効果が見られた。

◇深海底質調査の実施結果（速報）について

深海底質調査（速報）における分析結果は、概ね令和元年度の調査地点と同程度であった。

◇今後の留意点

- ・宇奈月ダム先行操作については、来年度も試験運用を継続すること。その際、今年度の検証結果を踏まえて来年度の試験運用内容を検討すること。
 - ・深海底質調査の年代測定結果については、次回の評価委員会までに調査結果を報告すること。
 - ・次年度計画の環境調査に向けて、アユの放流数と出水、採捕尾数との関係や、海域底質調査の分析項目に底質硬度の追加等、調査の実施方法を検討すること。
- 以上